

詩編 100 : 1~5

ヨハネによる福音書 17 : 3

「永遠の喜び」

(ハイデルベルク信仰問答 問 57~58) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

<死後の世界?>

「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」

今日の御言葉には「永遠の命」という言葉が出てきました。

「永遠の命」とは、何でしょうか。まずそもそも「永遠」とは何でしょうか。

わたしたちは普通、「永遠」と聞くと、無限に続く時間、果てしなく終わらない時間のことを思うかも知れません。では、「永遠の命」と言う時。それは、死なない「不死」のようなことを言うのでしょうか。でも、わたしたちは必ず死を迎えます。そうであるならば、肉体は死ぬけれども、魂的なものは死なない。永遠の命とは、そういう、「靈魂不滅」みたいなことを言っているのでしょうか。

…わたしたちは、誰も死んだ後のことを知りません。それで歴史の中では、人間の死後について色々なことが想像され、多くのことが語られたり、描かれたりしてきました。

でもわたしたちは、このことを、神の言葉である聖書から教えられるべきです。そして聖書は、わたしたちが死んだ後のことを、そう多くは語っていません。

聖書がわたしたちに教えていることは、神の御子でありながら、まことの人間となられたイエスさまが、死んで、復活なされたこと。そして、わたしたちも死んだ後、このイエスさまの復活に続いて復活し、イエスさまに似た者となる、ということです。

このように聖書が示すことから、教会は、「身体のよみがえり」を信じる。そして、「永遠の命」を信じる、と告白してきました。

今日は、この「身体のよみがえり」と「永遠の命」について、『ハイデルベルク信仰問答』の問 57、58 を見ながら、聖書が教えている、わたしたちのことについて知りたいと思うのです。

<身体のよみがえり>

さて、まずこの『ハイデルベルク信仰問答』は、すでに幼い頃に洗礼を受けている者の信仰の学びのために作成された書物です。ですから、信仰問答で語られていることは、洗礼を受けて教会の群れの一員となり、イエスさまの十字架によって罪を赦され、イエスさまと一つに結ばれている者について、語られているということになります。

洗礼を受けた者は皆、全身を水の中に浸すように、自分の存在の全てをイエスさまの中に

浸され、イエスさまと結ばれ、一体となります。そうして、イエスさまを頭とする、イエスさまの体の一部になるのです。

[頭なるキリストのもとに迎え入れられる]

そのような者が、この地上での命を終えたらどうなるか。『ハイデルベルク信仰問答』は「身体によみがえり」を信じる、ということの意味として、問 57 で、まずこのように教えています。

問 57 「身体によみがえり」は、あなたにどのような慰めを与えますか。

答 わたしの魂が、この生涯の後（のち）直ちに、頭なるキリストのもとへ迎え入れられる

「わたしの魂が、この生涯の後直ちに、頭なるキリストのもとへ迎え入れられる」。

わたしたちは、必ずこの地上での生涯を終える日が来ます。そして死んだら、この地上を去って、わたしたちはどこへ行くのか。それは、「生涯の後直ちに、頭なるキリストのもとへ迎え入れられる」、と言っています。

「頭なるキリストのもとへ」。先ほど言いましたように、わたしたちは地上の生涯を歩んでいる中で、洗礼を受けたその時から、頭なるキリストの体の一部とされます。イエスさまと、分ち難く、しっかりと結ばれるのです。

そうなったら最後、わたしとイエスさまの間は、もはや死でさえも、引き離すことは出来ません。復活なされたイエスさまは、死にも打ち勝たれたお方です。たとえわたしが地上で死んでしまっても、この「わたし」という存在は、ずっと復活のイエスさまに結ばれたまま、イエスさまから離されることはない。わたしという存在が地上を離れても、わたしのすべては、イエスさまの御許に迎えられて、このお方とずっと一緒にいる（ルカ 23:42~43）。このお方の御腕に、ずっと抱かれています。

それが、聖書が御言葉を通して教えていることです。

ですから、ある人が指摘していましたが、キリスト教ではクリスチャンが亡くなった時、供養する、慰霊する、ということが一切ありません。召された方について、その方の霊が、どこかに留まっているとか、さまよっているとか、そんな心配をする必要が一切ない。

なぜならその方は、生涯の後、直ちに、頭なるイエスさまの御許に迎え入れられているからです。地上を歩んでいる時から、結ばれて、ずっと一緒にいて下さったイエスさまが、死んでもなお離れることなく、その方のすべてを捕らえて、ずっと一緒にいて下さるからです。

このことは、信仰によって与えられる、大いなる平安、大いなる慰めです。

でも、ちょっとここで、そうすると中には、イエスさまを信じることなく召されてしまった人のことを思う方があるかも知れません。その人たちはどうなるのだろうか。

…でも、わたしたちが、自分以外の人について、あの人は救われたとか、救われなかったとか、そんなことを言うことは全く出来ません。救いは、神さまがお決めになることであり、わたしたちには分かりようがないことだからです。今回、ハイデルベルクが語っているのも、

イエスさまを信じている「わたし」の信仰、「わたし」の救いのことなのです。

でも、確かなことは、すべての人の命は、…一人一人が心に思うその方の命も、神さまがお造りになり、神さまが愛され、神さまがご支配なさっている命であるということです。

そうであるなら、わたしは、一人一人が心に思う方のことも、神さまは顧みておられ、憐れんでおられ、心から愛しておられ、その方もきっと、御手の内に置いて下さるに違いない。そう信じたい。信じてよいのではないか。そう、思っています。

[栄光の御体と同じ形に]

さて、「身体によみがえり」についての問57は、わたしがこの生涯の後直ちに、イエスさまのもとへ迎え入れられる、と語ったあと、答えの後半でこう続けます。(というだけではなく、)「やがてわたしのこの体もまた、キリストの御力によって引き起こされ、再びわたしの魂と結び合わされて、キリストの栄光の御体と同じ形に変えられる、ということです。」

ここで、少し注意したいのは、『ハイデルベルク信仰問答』が、人間の存在を、体と魂が別々であるかのように描いていることです。

『ハイデルベルク信仰問答』の表現は、時代的な背景や影響もあり、決して完全なものではありません。教会の歴史の中でも、このことは指摘されてきたことです。聖書においては、人間を肉体と霊の二つに分ける、霊肉二元論的な考えは認めていないのです。

しかしここで、『ハイデルベルク信仰問答』が「魂」や「体」という言葉を使って言いたかったこと。それはつまり、「わたしという存在まるごと全部」ということです。

この「わたし」という人格、存在を造り上げている、肉体も心も魂も霊も含めた、すべてのもの。「わたし」を存在させるために、神さまが与えて下さったものすべて。その全体が「わたし」であり、その「わたし」の存在全てを、神さまが救いとして下さる、ということです。

ですから、「身体によみがえり」について、問57の答えは「わたしのこの体」が引き起こされる、よみがえる、という言い方をしています。それは、よみがえりとは、全くの別の人間になることではなく、今のこのわたしという存在が、全部救われて、このわたし自身としてよみがえる、ということを語ろうとしているのです。

この「よみがえり」は、「やがてわたしのこの体もまた、キリストの御力によって引き起こされ」る、とあるように、「やがて」、将来、起こることです。

それは、救いの完成の日。天に上げられたイエスさまが、再び来られる終わりの日に、わたしは、わたしとしてよみがえり、新しい体を与えられ、このわたしが、イエスさまの御前に立つ、ということなのです。

罪に陥り、神さまに背き、離れてしまっていたわたしたちは、イエスさまの十字架の死によって罪を贖われ、洗礼を受けて、イエスさまと一つに結ばれ、神さまと共に生きる者とされました。

しかしなお、この世にあって、罪の戦いは続いています。罪を赦されたにも関わらず、わたしたちの性質は、やはり罪深いものです。そして、まとっているこの肉体は、弱く、脆く、痛んだり、病んだり、老いたりしていく体です。

しかし、わたしたちは、この地上を、この体で、このわたしで、救われた者として生きていく。そして、いつか死ぬのです。そして、わたしたちは、イエスさまの御許にわたしのすべてを置かれて、終わりの日が来るのを待つのです。

やがて、その日が来たなら、神さまの救いが、全ての者に、はっきりと、完全に表されます。神さまが、わたしを罪のない者として受け入れて下さっていることが、神の子として下さっていることが、はっきりとこの目に見えて明らかにされる。イエスさまに結ばれているわたしたちは、その復活なされたイエスさまのような、新しい、朽ちない、栄光に輝く体を与えられます。神さまがそうして、このわたしの救いを、完成させてくださるのです。

わたしという存在を造るあらゆるもの、体も心も魂も霊も、そのすべてが、イエスさまに救われて、新しくされて、完成させられる。

それが、わたしたちの生涯の後、やがて来る終わりの日に待ち受けているものなのです。

…だからこそ、わたしたちは、今この地上の人生を歩む人生を、そしてこの体を、決して蔑ろにはしてはいけません。確かに、この体は、弱くて、欠点があって、好きになれない部分もあるかも知れませんが、わたしたちはこの体で、罪を繰り返してしまいます。

でも神さまは、このわたしを形造るすべてを愛し、すべてを救って下さったのです。

それは、イエスさまが、神の御子でありながら、まことの人となるために、受肉されたこと。わたしたちと同じ、弱く、傷つきやすい、朽ちる体を取られ、そのお体で、空腹を感じ、誘惑に遭い、悩まれ、苦しまれ、地上の生涯を歩まれたこと。そのことこそ、神さまが、このわたしたち人間という存在を、このわたしを形造る全てを、わたしの人生の全てを、どれほど愛し、憐み、慈しんで下さっているかを物語っています。

ですから、魂だけ救われ、体は残念ながら永遠に滅びます、ということではありません。救いは精神論ではありません。神さまは、わたしの全てを、この存在を、救って下さいます。

そのために、まことの人となられたイエスさまは、わたしたちが死ぬように、確かに死なれた。そして、確かに、よみがえりの体をもって、復活なされたのです。

それは、わたしたちが死んだとしても、やがて復活させていただける、ということの確かな保証であり。このわたしの存在まるごとを、救って下さり、新しくして下さり、栄光に満ちたものにして下さるといふ、確かな約束なのです。

そうであるなら、今この時も、わたしたちは、神さまがそこまで愛し、慈しみ、救って下さった、今ここにある自分という存在を、人生を、命を、全て大切に、感謝しつつ、喜びつつ、歩まなければならないのではないのでしょうか。

今、わたしたちは、結ばれているイエスさまのお姿が見えません。しかし、やがて来る終

わりの日。わたしたちも、イエスさまと同じ栄光の体を与えられたなら、イエスさまと顔と顔とを合わせて相まみえる。この目で、イエスさまを仰ぎ見る、そのような時が来るのです。

今の歩みと、死んだ後の歩みは、断絶しているわけではありません。今はまさに、その栄光、その喜び、その完成に向かっている最中です。

でも一方で、わたしたちは、イエスさまに結ばれた時から、この地上を生きる時も、死ぬ時も、そして永遠に至るまで、このわたしの存在を愛し、救い、完成させて下さるために、ご自分の命を尽くして下さったイエスさまと、変わらず、いつまでも、一緒なのです。

### <永遠の命>

そして、『ハイデルベルク信仰問答』の問 58、「永遠の命」です。聖書が語る「永遠の命」。それは、よく一般に言われるような、「時間」が延々と続いていくことではありません。

ヨハネによる福音書 17：3 をもう一度読んでみましょう。「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」

永遠の命とは、神と、イエスさまを知ること。そう語られています。

ここに「知る」という言葉が出てきますが、聖書において、この「知る」という言葉は、頭で理解するような、理論的な知識のことを言うものではありません。

創世記に、「アダムは妻エバを知った」という言い方があるように、聖書の「知る」という言葉の意味は、愛の関係を結ぶことであり、人格と人格が深い関わりを持って、親しい交わりをもって、共に生きることを「知る」というのです。

ですから、わたしたちの「永遠の命」とは、わたしたちが、唯一のまことの神さまと、そして神さまがお遣わしになったイエス・キリストと、愛の関係に生きること。神さまに愛されていることを知り、その愛にわたしたちも応え、神さまと共に親しく生きること。それが、わたしたちの「永遠の命」なのです。

神さまは、時間さえもお造りになった、永遠から永遠にいますお方です。このお方と、深く結ばれること。このお方と、共に生きること。それが、わたしたちの永遠の命なのです。

この永遠の命は、神さまがお遣わしになった、御子イエスさまによって示され、与えられます。イエスさまは、わたしたちには見えない、天におられる神さまの御心、思い、存在、そのすべてを、わたしたちに明らかにして下さるために、まことの人となって、この地上に来られたお方だからです。

イエスさまが、わたしたちに示して下さった神さまの御心。それは、神さまが、ご自分の愛する御子イエスさまの命を与えるほどに、わたしたちを愛して下さっているということ。御子にわたしたちのすべての罪を負わせて十字架につけてでも、わたしたちの罪を赦して下さるということ。イエスさまを死者から復活させられたその神の御力で、わたしたちにも復活を与えて下さるということです。

わたしたちは、神さまに遣わされ、まことの人となり、この地上を歩いて下さったイエス

さまを通してこそ、神さまの愛を知り、神さまの罪の赦しを知り、そしてよみがえりの約束を知ることが出来ます。

そして、このイエスさまを通して、わたしたちが、神さまの愛を受け取り、救いを受け取り、洗礼を受ける時。わたしたちは、イエスさまと一つに結ばれて、永遠なる神さまと共に生きる命が始まる。それこそが、わたしたちの「永遠の命」なのです。

ですから、「永遠の命」とは、決して死後のことを言っているではありません。

問 58 の答えの前半に注目します。こうありました。

問 58 「永遠の命」という箇条は、あなたにどのような慰めを与えますか。

答 わたしが今、永遠の喜びの始まりを心を感じているように、…

答えには「わたしが今、永遠の喜びの始まりを心を感じているように」とありました。そうです。イエスさまの救いを信じて、結ばれた時から、永遠の命は、もう始まっている。もうその時から、この今もまさに、永遠の喜びを、すでに味わい始めているのです。

そして、答えの後半にあるように、「この生涯の後には、目が見もせず耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったような完全な祝福を受け」る、というのです。

わたしたちは、イエスさまと結ばれ、罪を赦され、背いた神さまの御許に帰り、神さまと共に生きる「永遠の命」を、永遠の喜びの始まりを、生き始めています。

そして、生涯の後、終りの日。救いの完成の日。わたしたちはよみがえりの体を与えられて、今は見る事が出来ないお方を、この目で直接はっきり見るようになる。すべてのことが明らかにされて、神さまのご支配がすべてを包み込み、その栄光に輝く神さまの御姿を仰ぐ日が来る、と約束されています。

それは、人の心に思い浮かびもしなかったような、完全な祝福である、と言います。大いなる喜び、大いなる平安、大いなる慰めの中に、完全に入れられるのです。

ヨハネの黙示録 (21 : 4) は、終わりの日について、こう語っているところがあります。

「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

そして、わたしたちは、神さまを永遠にほめたたえるのです。涙を拭われ、罪を拭われ、癒され、慰められ、神さまと共に永遠にあることを、喜び、感謝し、賛美するのです。

神さまをほめたたえる。礼拝する。これこそ、「神の形」に造られたわたしたちの、本来の姿であり、生きる目的であり、そして最大の喜びです。

この、完全な祝福に向かって、永遠の喜びに向かって、わたしたちは歩んでいるのです。

繰り返しになりますが、この永遠の喜びは、もうすでに、今ここで始まっています。

イエスさまを信じ、神さまの愛を知り、教会に繋がって、こうして礼拝をささげている。

神さまの御前に出て、御言葉を聞き、聖餐の食卓を囲み、祈り、賛美の声をあげてほめたたえている。それは、この世にありながら、わたしたちが、終わりの日の完全な祝福を少し先取りして、その永遠の喜びを、もう今ここで味わい始めている、ということなのです。

…イエスさまと結ばれて歩む人は、幸いです。イエスさまを知り、神さまを知り、「永遠の命」を生きる人は幸いです。そのことこそ。つまり、イエスさまが、神さまが、永遠に共にいて下さる、ということこそ。苦しみや、困難や、嘆きの多いわたしたちの人生にあって、決して失われない喜びであり、深い慰めであり、確かな希望なのです。

### 【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちに、イエスさまを知り、あなたを知る、「永遠の命」の喜びを与えて下さったことを感謝いたします。そして、生きるにも、死ぬにも、イエスさまと結び合わされているわたしたちが、永遠にイエスさまのものであるという慰めを、感謝いたします。

どうかわたしたちが、このイエスさまに結ばれた者たちの群れが、永遠の喜びの始まりの中で、あなたを心から礼拝し、心からほめたたえつつ、歩んでいくことができますように。よみがえりを、完全な祝福を、共に待ち望むことができますように。

そして、あなたに造られたすべての者が、イエスさまを知り、あなたを知り、永遠の命を与えられ、共にイエスさまの体に結ばれますように。

このお祈りを、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讚美歌】 580 「新しい天と地を見たとき」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讚美歌】 29 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、  
あなたがた一同と共にあるように。アーメン